

## ノーベル賞：真鍋氏、ノーベル物理学賞 ぶきっちょ、米国で大成 人が合点したことでも考え続けた

簡易検索 2021.10.06 東京朝刊 25頁 社会面 (全1,554字)

今年のノーベル物理学賞受賞が決まった米プリンストン大上席気象研究員の真鍋淑郎（しゅくろう）さん（90）は、地球温暖化など、今では世界各国で当たり前のよう話題になる気候変動の予測の基礎を築いた。「自分は頭が切れるというのではないが、人が合点したことで『待てよ』とくどいほど考え続けることが、結果としてうまくいった」。以前の毎日新聞の取材にそう語っていた。

1931年、現在の愛媛県四国中央市新宮町生まれ。祖父や父が医師という家に育ち、自身も一時医師を志した。しかし、結局は東京大で正野重方教授（当時）の研究室に入り、気象学を専攻した。気象学を選んだのは「記憶力は悪いし、手はぶきっちょ。空を眺めて物思いにふけるくらいしか取りえがないと思った」からだ。

当時、米国ではコンピューターで物理の法則に基づいて天気予報をする「数値予報」の研究が進んでいた。一方、東大の木造の研究室で、真鍋さんらは手計算で数値予報に挑んでいた。

そんな中、大学院生だった真鍋さんの論文に目を留めた人がいた。米気象局大気大循環セクション（後の米海洋大気局地球流体力学研究所）を率いていたジョセフ・スマゴリンスキー博士だ。真鍋さんを自分の組織に招き、渡米直後は自宅に滞在させた。真鍋さんは「何も分からず、ぼけっとしていたら、スマゴリンスキーさんの奥さんが家の探し方などを教えてくれた」と話した。

スマゴリンスキー博士は、着任したばかりの真鍋さんに新しい「気候モデル」を開発するという大きな構想を語り、開発を指示した。その気候モデルは、天気予報のための数値予報モデルを基に、長期的な気候の変化の予測や再現を可能にするものだ。「温暖化がこんなに大きな問題になるとは夢にも思わなかった」というが、博士のプランは魅力的だった。「実に興奮しましたよ。大変な研究だと思ったけれど、面白いテーマだし大喜びで飛び込んでみたら案の定大変でした」

その後、真鍋さんは大気の状態を地面から垂直に立った1本の円柱に見立て、温度分布を考える手法「一次元大気モデル」を開発。その手法を生かし、気候変動予測につながる画期的な研究成果を次々と発表した。

取材では当時の研究環境を「天国だった」と振り返った。スマゴリンスキー博士は莫大（ばくだい）な研究費を確保し、真鍋さんらの研究に予算をつけた。外部から2～3年で成果を出すことを求められるようなプロジェクトの話が来ると「そんな短期間で期限を切られたらできない」と断るような人だった。研究の進め方も真鍋さんに任せてくれ、いちいち相談することもなかった。

「スマゴリンスキーという人がいなかったら私のキャリアは存在しなかった」。真鍋さんはそう話して、博士への畏敬（いけい）の念を見せた。【大場あい、写真も】

### ◇研究仲間ら祝福

かつての研究仲間や気候科学の研究者からは祝福の声が上がった。

「とことん考える人で、時間も忘れて議論した」。阿部彩子・東京大大気海洋研究所地球表層圏変動研究センター長は真鍋さんらが率いる研究プロジェクトの下で働いたことがある。「学生に研究テーマを与える時は、赤ん坊に離乳食を食べさせるように、大きな研究課題を丁寧にテーマを小さくして渡すといい」と助言してくれたという。阿部さんは「大きな視点と小さな視点を併せ持つと共に、とても若い研究者にも優しい人だった」と振り返る。

気候科学者の江守正多・国立環境研究所地球システム領域副領域長は「物理法則を組み合わせると地球の気候が再現できるなんていう誰もやったことがなかったところからモデルを作った。現在の地球温暖化に関する我々の理解や将来予測に欠くことができない研究分野を作った、とてつもなくすごい研究者」と手放しで褒めたたえた。【鳥井真平、吉田卓矢】

毎日新聞